京都大学	博士（文学）	氏名	折山　桂子
論文題目	敦煌莫高窟における弥勒の変遷		

（論文内容の要旨）

本論文は、敦煌莫高窟における弥勒の造形に着目し、その図像の変遷や制作の思想的背景について考察したものである。弥勒は、釈迦に次ぎ未来世において仏となる存在として、仏教の伝播に伴い各地で信仰や造形が生まれ、育まれていった。莫高窟においてもそれは例外ではない。本論文は、図像が信仰内容や政治社会情勢など多方面の情報を内包する存在であるとの考えに立ち、時代ごとの弥勒の表現やその変化を手掛かりに、弥勒をとりまく思想の移り変わりを繙いていくことを目指している。

本論文は、「序論」に続き、４章からなる本論があり、最後に「結論」で総括を述べる。

「序論」は、莫高窟における弥勒の表現をめぐる問題の所在を明確にし、本論文の目的を示すものである。第１節では、莫高窟の特質とその造形表現を概観し、問題の所在を明らかにした。第２節では、本論文の構成と内容について概説し、本稿における問題解決の手法について述べている。

続く本論の第１章「北朝期の弥勒に関する表現について」では、西魏・北周に、その前後の時代とは異なり、弥勒の作例数が減少する点に着目し、その理由について考察する。北魏には交脚菩薩像として、隋には兜率天上の様子を描いた弥勒経変として、しばしば窟内に表現された弥勒であるが、西魏・北周の窟においてはその作例数が著しく減少した。ここには弥勒に対する信仰の衰微やその他の思想の隆盛が推測されるが、この点について詳らかにした先行研究は見られない。そこで本章では、現地における当該期の窟の網羅的調査を手がかりに、当時の莫高窟における信仰の様態について検討している。第１節では、北涼・北魏および隋の窟に表現された弥勒の作例について述べる。北涼・北魏の弥勒は交脚菩薩塑像として窟の上部に配されることが多く、隋の弥勒は兜率天宮の弥勒を描く弥勒経変相図の形式で、やはり窟の上部に描かれる。このように北涼・北魏の弥勒塑像と隋の弥勒経変は一見同一系譜上にあるように思われるが、その中間期である西魏・北周の窟、とりわけ北周窟には弥勒の表現がほとんど見られないことを、現存作例や史料から確認する。続く第２節では、西魏・北周の窟についてより詳細に検討を加えている。窟内壁面の奏楽天人の表現や中心柱の構造の変化から、西魏・北周の窟は、北魏以前とは窟内の空間認識が異なると考えられる。そして北周窟で頻繁に表される仏説法図や千

仏に着目し、それまでのような個々の具体的な仏に対する信仰ではなく、包括的な「仏」という概念や仏性に対する理解の深まりと信仰の高まりがあったことを指摘している。第３節では、北周域内の他の作例、及び北斉の作例と比較することにより、上記の変化が北朝の西側のみに起きた可能性を提示した。第４節では、以上の検討の結果明らかになった北周での信仰の変化の要因について、当時莫高窟において流行していた涅槃経信仰と関連を有することを指摘している。

上述のとおり、一時は減少した弥勒の表現だが、隋に入り再び姿を見せるようになる。その契機について考察したのが、第２章「隋の莫高窟における弥勒経変相図をめぐって」である。北朝期の弥勒は、基本的には単独の塑像として表されていたが、隋に入るとより複雑な表現を伴うようになり、典拠に基づくと推測される弥勒経変相図へと大きな変貌を遂げる。しかし、そうした図像の出現の契機や変化の要因については詳らかになっていない。そこで本章では、これらに重要な示唆を与えると考えられる、第262窟に描かれた兜率天上の弥勒の表現に着目し、弥勒経変が発生した経緯とその背景にある時代的希求について検討している。第１節では、第262窟の構成や、その窟頂部分に描かれた兜率天上の弥勒表現について考察を加える。第262窟は窟内西壁の龕に本尊釈迦如来塑像を安置し、龕の上部には閻浮提における文殊菩薩と維摩居士の問答の場面を描く。兜率天上の弥勒はさらにその上の窟頂部分にあり、同図に描かれた阿修羅及び須弥山が、文殊・維摩のいる閻浮提と、弥勒のいる兜率天とを有機的に繋ぐモチーフであったことを指摘した。また、これらの図像に「釈迦から弥勒への仏法相承」の流れが表されていることも明らかにしている。加えて、他の隋の作例では、時代が下るにつれて、維摩経変と弥勒経変との関係性が曖昧化する等の理由から、第262窟の弥勒経変は同主題の作例の中では早期の制作である可能性を提示している。続く第２節では、隋に入って弥勒が再び表現されるようになるとともに、その後多数の弥勒経変が描かれていった背景について、検討を加えている。同時期の敦煌文献の願文から窺える厭世の風潮及び兜率天への憧憬の様子から、隋の時代には、弥勒経変を受容する土壌が形成されていたことを指摘する。また、造像の面においても、北周の廃仏後に復仏の雰囲気が高まった時期があったこと、その中で北魏や西魏の表現を踏襲するような古典学習がなされたことを同時期の作例群から示している。以上により、第262窟の兜率天上の弥勒も、こういった時勢の中で、西魏・北周と廃れていた弥勒の表現が再び現れる端緒であったことを述べる。

第３章「隋の弥勒経変相図付近に描かれた二菩薩像」では、隋の弥勒経変付近に描かれた二菩薩像を取り上げ、その意義と図像の典拠、及びその表現の変遷について論じる。隋の弥勒経変の周囲には、ほぼすべての作例で、向かって

左に半跏思惟菩薩、右に倚坐菩薩を描く二菩薩像が付随する。左右の組み合わせは不変であるが、弥勒経変との位置関係は一定でなく、また、そもそも当該二菩薩が何を表しているかという点についても専論はない。そこで本章では、二菩薩像の典拠を検討した上で、表現の変遷とその意義を明らかにすることを試みる。第１節では、隋の弥勒経変、及びその周辺に描かれる二菩薩について、図像の内容、及び先行研究での言及を概観する。隋の弥勒経変は、そのほぼすべてにおいて、付近に二菩薩像が描かれているが、弥勒経変との位置関係には小異があり、弥勒経変を挟むように描く作例も、その下に描かれた薬師経変を挟むように描く例もある。これは、二菩薩像の持つ意義に変化があったことを示すと推測されるため、第２節では、考察の前提となる隋の弥勒経変の編年に取り組んだ。窟の位置、装飾文様及び壁面の構成、窟内に描かれた主題及び弥勒経変中のモチーフという３点から、弥勒経変が描かれた窟の制作年代の前後関係を考察し、大きく２つの制作時期に分けられることを指摘した。一方で、弥勒経変の左右に二菩薩を表現する例と、薬師経変の左右に表現する例の先後は明らかにできていない。そこで第３節では、経典及び造像作例を手がかりに、二菩薩像の表現の源流について検討を加えた。その結果、経典上の典拠としては、弥勒及び薬師関連経典が挙げられるとしている。また、造形上の淵源として、半跏思惟菩薩・倚坐菩薩を一具とする可能性、及び半跏と倚坐の単独像を組み合わせた可能性を提示する。経典上の明確な典拠は不明だが、その造形から、当該二菩薩像は、弥勒菩薩と関係を有する２種類の異なる淵源を持った造形を組み合わせて作られたとの見解を導き出している。以上の検討を元に、第４節では、当該二菩薩像が表現されるに至った経緯と、図像及び意味の変遷について論じる。当初は弥勒菩薩と関係を有していた二菩薩は、その後思惟・授記の菩薩像という像容のみが好まれ、本来の意義を失った。弥勒経変から離れていくとともに、意義付けを失った結果、最終的に姿を消すに至ったと結論付けている。

第４章「敦煌莫高窟における初唐の弥勒経変相図の嚆矢をめぐって」では、初唐の弥勒経変における変化に着目する。隋の弥勒経変は上生経に基づく兜率天上の弥勒菩薩の表現のみであったが、初唐にはこれとともに下生経に基づく内容、すなわち閻浮提に作り上げられた浄土と弥勒仏が表現されるようになった。この変化の要因としては、閻浮提での弥勒を表現する点や、初唐という制作時期を根拠に、弥勒を自称した武則天との関係が指摘されてきた。しかし、議論の前提である初唐の弥勒経変の制作年代については、未だ十分な検討がなされていないため、こうした見解の妥当性が検証できない状態にあった。そこで本章では、初唐の制作とされる弥勒経変群について編年を行い、第329窟が濫觴となる作品であることを明らかにした上で、同作が隋から初唐にかけての弥

勒経変群の中でいかなる位置付けを有するかを論じている。第１節では、隋及び初唐の弥勒経変の表現について検討している。隋と初唐の弥勒経変の間には、主題・規模・構図等に違いがあり、特に主題については、閻浮提に作り上げられた弥勒浄土を表現するという大きな差異が認められることを指摘する。続く第２節では弥勒経変をめぐる先行研究を振り返り、現状における問題点の確認とその解決の手がかりについて検討する。従来初唐の弥勒経変については、法華経との関連や武則天の影響が指摘されてきたが、これらの指摘の妥当性を勘案するにも、初唐の弥勒経変の詳細な制作時期の検討がなされていないのが現状であった。これを踏まえ、第３節では初唐の弥勒経変の編年を行っている。編年にあたっては、窟頂の藻井部分や弥勒経変に描かれたモチーフを主たる判断基準として用い、第329窟が初唐の弥勒経変の中でも比較的早い段階、隋に近いころに描かれたことを明らかにした。第４節では隋末から唐初の政治情勢を確認し、続く第５節において、初唐の莫高窟に弥勒下生経変が生じた具体的な契機について考察している。莫高窟に下生経変をもたらした存在として、玄奘のような高僧の存在が可能性として浮上する。一般に当時の高僧の弥勒に対する信仰は、兜率天への往生を願う上生信仰であったとされる。しかし玄奘は、弥勒が閻浮提に下生する際には共にその地に向かうことを願っており、その思想は、兜率天と閻浮提の双方を描く初唐の弥勒経変の内容と合致することから、他の高僧にも同様の傾向があったと推測される。また、初唐の弥勒経変が両浄土を壁面いっぱいに表し、しばしば西方浄土変と対置される点については、三世仏思想の影響があるとの見解を提示する。初唐に入ると、阿弥陀信仰の高まりと両輪をなすように西方浄土変の制作も盛んになるが、隋の窟で見られた、過去・現在・未来の三世の仏の表現は、より具体的にその様相を想像できるよう、過去仏阿弥陀・未来仏弥勒の作りだす浄土として、壁面に大きく描かれるようになったとしている。

「結論」では、各章で論じてきた問題を総括し、莫高窟における弥勒の表現とその背景にある思想や社会状況との結びつきについて以下の結論を提示する。

莫高窟は、東西からの情報の流入とともに、当該地における信仰や表現の醸成により、図像の生成・変容が行われる場であった。釈迦に次いで如来となる弥勒は、開窟初期には多数の造像がなされる。しかし、その造像への意欲は継続することなく、時代によっては、造像活動が極めて減少する。その背景には、当該期における信仰様態の変化が関係すると見られ、弥勒の造像行為の隆盛と衰退の経緯は、社会状況の影響を如実に示すものであった。

西域からもたらされた情報の下に造営が進められた北涼・北魏の窟では、弥勒は兜率天におり、天人による讃嘆を受ける存在として重視されていた。その

様相が一変するのが、第１章で論じた西魏・北周窟であり、涅槃経信仰の隆盛とともに、弥勒の造像活動は衰微した。弥勒に対する信仰が常に盛んであったわけではなく、一時的とはいえ他の思想の隆盛の影に隠れていた時期があったことが判明する。

一方、北魏と隋の兜率天上の弥勒の図像には連続性がなく、隋の弥勒経変は、過去の弥勒図像の単純な再現ではない。隋の弥勒経変が創出された契機としては、北周末に起こった排仏からの復興という背景の下、仏法を継承した弥勒への思慕が高まり、造像に至ったという経緯を読み取ることができる。

隋に入り弥勒経変が盛んに制作される中でその周囲に二菩薩像が現れるようになるが、当該期の弥勒経変の編年を行うと、同像発生の経緯・変遷・消失の流れが理解できる。そこには、思惟・授記の菩薩を求める風潮の存在が指摘できる。

続く初唐の弥勒経変は、兜率天のみではなく、将来弥勒により閻浮提に作り出される弥勒浄土を描くものであった。同時期の阿弥陀信仰、西方浄土への往生の高まりと相乗するように、往生の困難な兜率天ではなく、未来世に築かれる弥勒の浄土への往生の希求という、より大乗的な信仰の高まりを認めることができる。

以上、造形化された弥勒を丁寧かつ適切に繙くことにより、弥勒にまつわる種々の信仰の様子を明らかにするとともに、造形の変化を辿ることで、当時の社会情勢を詳らかにすることが可能である点を改めて強調し、本論文の結論としている。

（論文審査の結果の要旨）

敦煌莫高窟は、中国甘粛省敦煌市の三危山の東側壁面に穿たれた仏教石窟群である。開鑿は前秦に始まるとも言われ、以後約一千年の間に無数の窟が開かれた。その造窟年代の幅広さと作例数の多さは、中国仏教遺跡の中でも屈指のものである。

莫高窟の美術は、河西回廊西端の都市・敦煌の近郊に開鑿されたという地理上の特性を持つ。そのため、中央の様式を受け継ぎつつ、西域の影響をも受けた独特の造形が、仏教美術研究者の注目を集めてきた。多くの遺品が残ることから、作品の主題、窟の思想的背景、造像主の社会的地位など、様々な観点からの研究がこれまでに行われている。

一方で、対象となる作品全体を通観したような研究は存在するものの、現地での調査が容易でないことと、現存作例の多さにより、個別の作品を詳細に検討した研究は、思いのほか少ない。そのため、美術史研究の基礎となる、制作年代や様式的特徴の検討といった必須の作業が、十全に行われてきたとは言い難い。これらの問題点を踏まえるならば、莫高窟の美術に対しては、各作品の緻密な検証を行い、美術史上の諸問題に関する基礎的事実を確認した上で、制作の背景的考察が行われなくてはならない。

こうした問題意識の下、本論文は、視覚的作品分析という美術史学の基本的な作業と、当時の莫高窟を取り巻く社会状況の分析を通して、莫高窟研究に新たな分析視角をもたらそうとする意欲的な研究である。

本論文は、序論に続き、計四章からなる本論、及び結論からなるが、本論文の検討を通して得られた主要な成果は、大きく三点に分けられる。

第一点は、制作年代が判明せず、従来同一時期の制作と一括りにされていた複数の窟について、その制作の前後関係を明らかにしたことである。例えば第329窟は、これまで漠然と唐代の早い時期の制作と考えられてきたが、様式的に近い時期の制作と考えられる第331窟や第341窟などとの前後関係は不明であった。しかし論者は、窟頂の藻井部分や弥勒経変に描かれたモチーフの様式的変遷を辿ることで、第329窟が初唐の中でも隋代に近い時期に制作されたものであることを明らかにした。そして、同窟が、同じく初唐前期の作と目される第331窟より先行する作例であること、また第341窟はそれらより遅れる盛唐に近い時期の制作であることを示した。その上で、弥勒の下生表現の在り方と、当時の社会情勢の考察から、第329窟は、内乱がひと段落した620年代以降、高昌が滅び、中央政権による河西支配がはじまる貞観十四年（640）までに制作されたとしている。このように、対象の実地調査に基づいて導き出された様式的判断と、史料に基づく社会的背景の考察の両面から、従来の年代観に転換を促した意義は特筆される。これにより、制作時期に関する新たな見解を提示し、莫高

窟の編年研究を前進させた点は高く評価されよう。

第二の点は、弥勒経変の図像解釈に新たな視点をもたらしたことである。特に隋代の第262窟に詳細な検討を加え、兜率天上の弥勒の図に描かれた阿修羅及び須弥山が、文殊・維摩のいる閻浮提と、弥勒のいる兜率天とを有機的に繋ぐモチーフとして描かれたことを指摘した点は、従来曖昧であった同図の解釈に大きな進展をもたらした。さらに、これらの図像に「釈迦から弥勒への仏法相承」の流れが表されていることを示した点も特筆に値する。これにより、莫高窟の弥勒経変の図像プログラムが、極めて綿密に計画されたものであることが明らかになるとともに、他の作例の図像解釈に再考を促した意義は大きい。

第三の成果は、弥勒の造像の変遷に着目することで、従来考えられていた以上に、莫高窟の造形活動に、社会状況の影響が見られることを明らかにしたことである。特に、西魏・北周における弥勒造像の衰退が、涅槃経の隆盛に関わる事、また隋におけるその復興が、当時の人々の現世忌避と天上世界の弥勒の希求に関わることを、諸史料を基に丹念に実証したことは重要である。これにより、莫高窟における他の尊格の制作背景の考察も、今後は見直しを迫られることになり、新たな研究領域の開拓につながる成果と言える。

このように本論文は、莫高窟における各時代の弥勒の表現について、従来あまり考察を加えられることがなかった細部や、隣接領域における研究成果などを活用しながら、数多くの新たな知見を加えている。本論文の提示した見解により、莫高窟に表された弥勒が、従来想定されていた以上に社会状況に左右され、弥勒信仰からだけでは捉え切れない、より多様な性格を持った造形作品であったことが明らかにされており、幾多の新知見や見解を提示した論文として高く評価される。

ただ、論者が心がけていた作品の造形分析や図像の比較については、なお一層精度を高めていく必要があり、また他分野の研究成果の援用についても、より厳密さが求められるだろう。しかし、これらの問題は、論者が新しい観点から莫高窟の弥勒の表象について論じたからこそ浮かび上がった問題ともいえ、関連領域研究者を含めた今後の議論を続けることで、研究がより深化していくと思われる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。２０２３年９月２８日、調査委員４名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。